



2020年度 第1回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況 予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2020年11月～2021年3月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、概ね「屋久島南付近での変動」もしくは「接岸傾向」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表面水温は、概ね「平年並み」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「平年並み」：約2年に1回程度の発生頻度

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年を上回る。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年を上回り、平年並み。
- (5) ウルメイワシは前年並みで、平年を下回る。
- (6) カタクチイワシは前年並みで、平年を下回る。

※「前年」は2019年11月～2020年3月。「平年」は過去5年の平均値。

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：管理部門 薄、清本

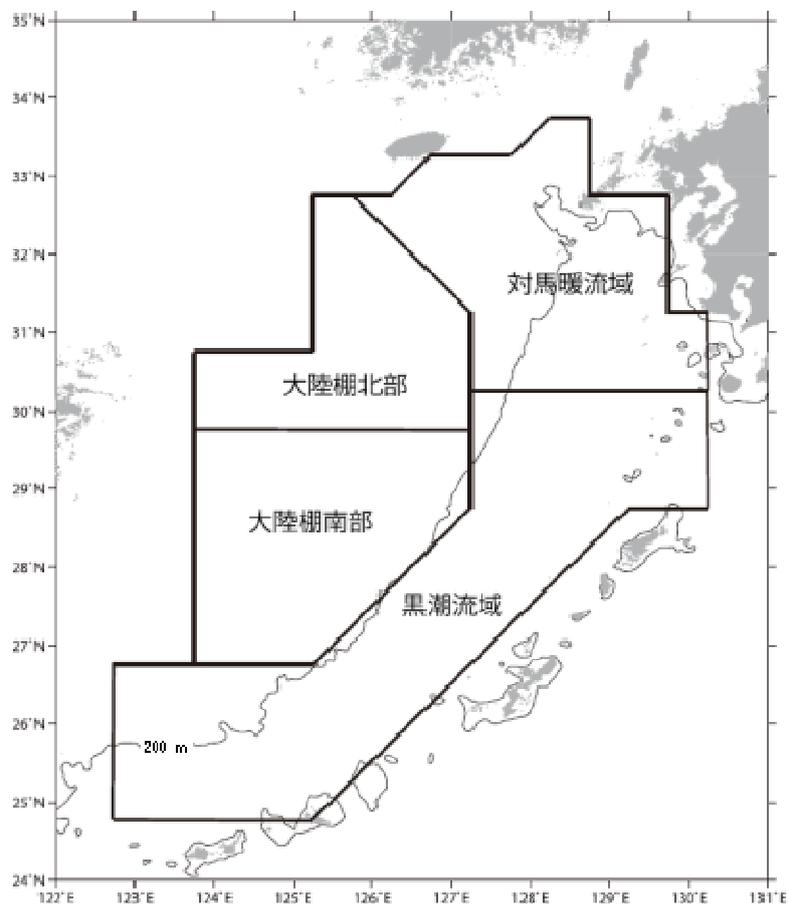
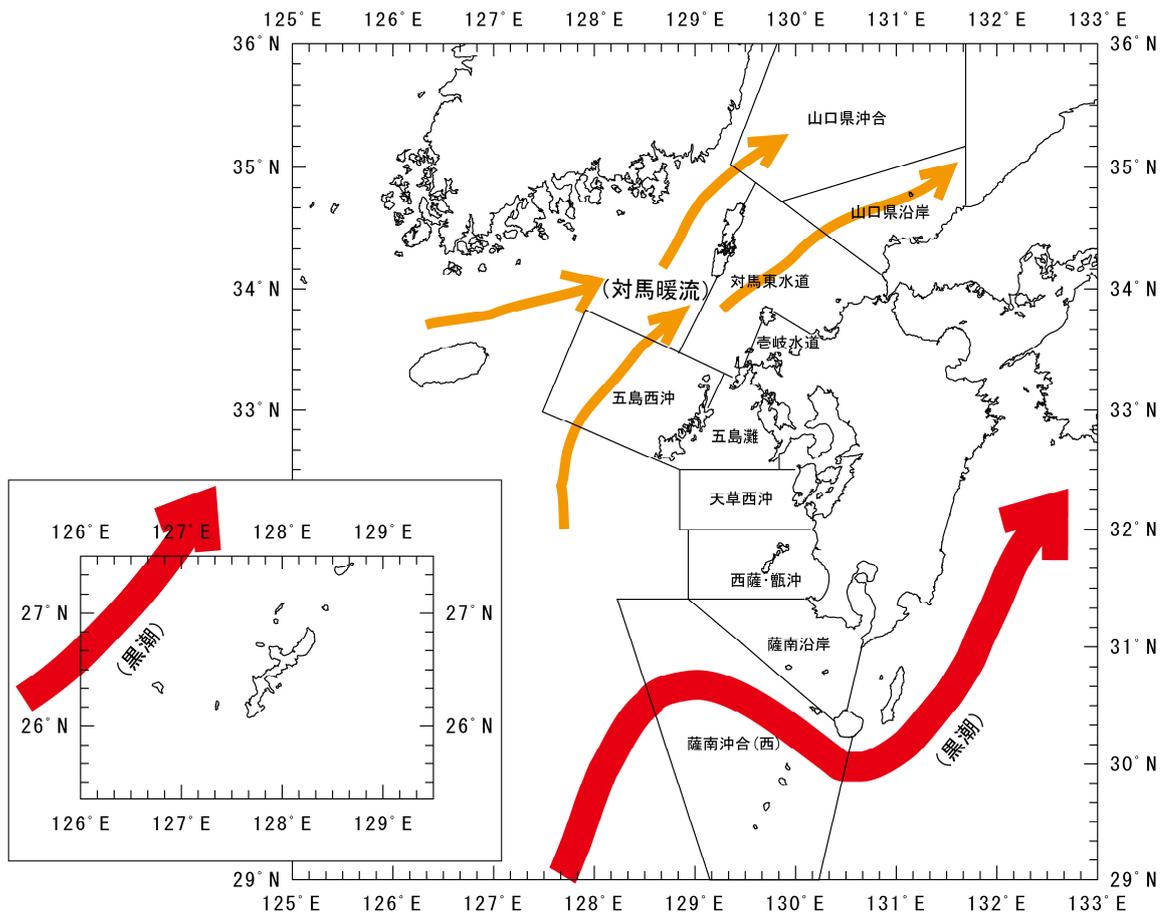
漁況：浮魚資源部 大下、黒田

海況：海洋環境部 渡邊、種子田

電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7677

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>



西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2020年11月～2021年3月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な南北移動を繰り返すが、概ね「屋久島南付近での変動」もしくは「接岸傾向」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、沖縄島周辺海域は「平年並み～やや低め」、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甕沖、薩南沿岸、薩南沖合、大陸棚上は「平年並み」、黒潮流域は「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2020年4月～10月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：4月「平年並み」、5月「やや高め」、6月「かなり高め」、7月「やや低め」、8月「やや高め」、9月「かなり低め」。

南部：4月「平年並み」、5月「やや高め」、6月「かなり高め」、7月「平年並み」、8月「かなり高め」、9月「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、4・5月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」、6月～9月は「接岸傾向」で経過。

(2) 海面水温

4月「平年並み」、5月「やや高め」、6月「はなはだ高め」、7月「平年並み」、8月「かなり高め」、9月「平年並み」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：4・5月「やや高め」、6・7月「平年並み」、8月～10月「やや低め」。

山口県沿岸：4・5月「やや高め」、6月～9月「平年並み」、10月「かなり低め」。

対馬東水道：4月「やや高め」、6月～8月「平年並み」、9月「かなり高め」、10月「やや低め」。

壱岐水道：4・6・8・10月「平年並み」。

五島西沖：4月「やや高め」、6・8月「平年並み」。

五島灘：4月「平年並み」、6・8月「やや高め」。

天草西沖：4・5月「やや高め」、6・8月「平年並み」。

西薩・甕沖：4月「平年並み」、5月「やや高め」、8月「平年並み」。

薩南沿岸：4月「平年並み」、5月「やや高め」、8月「平年並み」。

薩南沖合：4・5月「やや高め」、8月「平年並み」。

沖縄島南東：4・6月「平年並み」、8月「やや低め」、10月「かなり高め」。

沖縄島南東：4・6・8月「平年並み」、10月「やや高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：4月～6月「平年並み」、7月「やや低め」、8月「かなり低め」、9月「やや高め」、10月「平年並み」。

山口県沿岸：4月「やや低め」、5月～7月「平年並み」、8月「やや低め」、9・10月「平年並み」。

対馬東水道：4・6・7月「平年並み」、8月「やや低め」、9月「平年並み」、10月「かなり低め」。

壱岐水道：4月「やや低め」、6月「平年並み」、8月「やや低め」、10月「平年並み」。

五島西沖：4・6・8月「平年並み」。

五島灘：4・6月「平年並み」、8月「やや低め」。

天草西沖：4月「平年並み」、5月「やや高め」、6・8月「平年並み」。

西薩・甑沖 : 4月「やや低め」、5月「やや高め」、8月「平年並み」。
薩南沿岸 : 4・5月「平年並み」、8月「やや低め」。
薩南沖合 : 4・5・8月「平年並み」。
沖縄島南東 : 4・6月「平年並み」、8月「かなり低め」、10月「平年並み」。
沖縄島南東 : 4・6月「平年並み」、8月「やや低め」、10月「やや高め」。

3. 現況 (2020年10月中旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「平年並み」、南部「やや高め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸」。海面水温は「やや高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「平年並み」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の発生頻度
「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度
「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度
「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

東シナ海～日本海西南域マアジ・さば類・いわし類長期漁況予報

今後の見通し（2020年11月～2021年3月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2020年級群（2020年生まれ））、1歳魚（2019年級群）、2歳魚（2018年級群）。
魚の大きさは、マアジ・さば類は尾叉長、いわし類は被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量：前年並み。沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量：前年を上回る。沖合域の漁況は前年を上回り、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年並み。沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、東シナ海、五島灘・薩南が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では25～30cmの0歳魚（豆銘柄）および30～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では30～37cmの1歳魚以上（小～中銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量：前年を上回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：14～17cmの0歳魚（小羽・中羽銘柄）主体に、18～22cmの1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）も漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～20cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、山口県及び長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：5～10cmの0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が主体で、10cm以上の1歳魚（大羽銘柄）が混じる。

注：「前年」は2019年11月～2020年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2020年4月～8月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準だったが、1980・1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で推移している。

東シナ海・日本海での我が国のマアジ漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであった。2006年以降はほぼ横ばいであったが、2019年は8万トンと2018年に引き続き10万トンを下回った。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、一時的に60万～70万トン台に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし、2000年以降、50万トン前後に留まっている。2013年には1973年以降で過去最低の38万トンとなったが、2014年以降、高い加入量に支えられ、資源量は60万トン前後まで増加し、2018年の資源量は65万トンと推定されている（なお、2020年度の資源評価は2020年11月に実施される予定）。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2013年に6万トンと1973年以降で最も少なかったが、その後回復し、2018年は15万トンであった。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降は比較的安定しており、10万～20万トン程度で推移していた。2005年に高い値を示した後、緩やかに減少と増加を繰り返したが、2016年以降は20万トンを超えている。2018年は資源量が増加し、35万トンと推定されている（なお、2020年度の資源評価は2020年11月に実施される予定）。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降およそ5万トン前後で推移している。近年の漁獲量は、2011年の4万9千トンをピークにやや減少傾向にあり、2018年の漁獲量は4万1千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。2004年以降は増加傾向にあり、近年では2010年に急増した。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年の間、100万トン以上と多かったが、その後、急激に減少し、2001年～2003年における漁獲量は1千トン程度であった。2004年以降、漁獲量は増加傾向にあり、2018年は7万1千トンであったが、2019年の漁獲量は1万4千トンに減少した。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するウルメイワシの資源量は増減を繰り返しながら推移している。近年では2003年以降は増加傾向にあり、2015年には14万トンまで増加したが、2019年は9万トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1976年～1998年には2万トンを超えていた。特に1980年代後半から1990年代前半までは4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、2013年と2016年には5万トンを超える漁獲量となった。その後漁獲量は減少し、2017年以降は3万～4万トンの間で変動しており、2019年は3万5千トンだった。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1990年代に増加し、1998年には30万6千トンに達したが、2001年には13万トンまで減少した。資源量は2007年には24万7千トンとなったがその後減少し、2019年には10万4千トンとなった。

東シナ海・日本海における我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2004年には6万1千トンまで減少した。漁獲量は、2005年～2008年には増加したが、2009年～2013年には減少し、2019年には5万トンとなった。

2. 漁況の経過

2020年4月～8月の大中型まき網漁業の主な漁場は、対馬沖および東シナ海中・南部であった。この間の大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計2万7千トンで前年(2019年4月～8月、2万8千トン)並みであった。マアジは1万5千トンで前年(1万6千トン)並み、さば類は8千トンで前年(7千トン)並みであった。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、前年を上回り、平年並みだった。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。マサバは、前年・平年を上回った。漁獲の主体は4・5月は26～43cmの1歳魚以上で、6月以降25cm以下の0歳魚が加わった。ゴマサバは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は4・5月は30～40cmの1歳魚以上で、6月以降25cm以下の0歳魚が加わった。マイワシは、前年を上回り、平年並みであった。漁獲の主体は、16cm以下の0歳魚であった。ウルメイワシは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は15～25cmの1・2歳魚と、5月から3cm以上の0歳魚だった。カタクチイワシは前年・平年を下回った。漁獲の主体は4月には8～10cmの1歳魚で、5月～7月には9cm未満の0歳魚に移り、8月には4～11cmの0・1歳魚となった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体で、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2018年級群の豊度は2017年級群並みで、2019年級群の豊度は2018年級群並みとみられる。2020年級群の評価は難しいが、幼稚魚分布調査などから判断すると2019年級群並みもしくは上回るとみられる。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚が前年並みであることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量と直近までの漁獲状況を反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並みと考えられる。

(2) マサバ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体となる。近年の漁況から判断して、2018年級群及び2019年級群の豊度はそれぞれ前年の年級群の豊度を下回るとみられる。2020年級群の評価は難しい

が、産卵量調査などから判断すると、2019年級群を上回る可能性がある。来遊群の主体が0・1歳魚であることから、全体の来遊量は少なかった前年を上回ると考えられる。

沖合域の漁況は来遊量と直近までの漁獲状況を反映して、非常に低調だった前年を上回ると考えられる。沿岸域の漁況は4月～8月の漁況から判断して、前年・平年並みと考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体となる。沿岸域では2歳魚以上(小銘柄以上)も漁獲される。2018年級群の豊度は2017年級群並みで、2019年級群の豊度は2018年級群を下回るとみられる。2020年級群の評価は難しいが、直近の漁況は低調であるため、少ない2019年級群並みとみられる。これらから全体の来遊量は前年並みと考えられる。

沖合域の漁況は来遊量と直近までの漁獲状況を反映して、前年並みと考えられる。沿岸域の漁況は4月～8月及び直近の漁況から判断して、前年・平年を下回ると考えられる。

(4) マイワシ

例年、11月～3月期の前半には0歳魚(小羽・中羽銘柄)が主体に漁獲され、後半には1歳魚以上(中羽・大羽銘柄)が漁獲される。2019年級群の豊度は2018年級群より低いと考えられる。2020年級群の評価は難しいが、これまでの漁況の経過や産卵調査結果を考慮すると、2019年級群の豊度を上回ると考えられる。漁獲の主体となっている漁期前半における0歳魚の来遊状況を考慮すると、全体の来遊量は非常に少なかった前年を上回り、平年並みと考えられる。

(5) ウルメイワシ

例年、11月～3月期には0・1歳魚(中羽・大羽銘柄)が漁獲の主体となる。2019年級群の豊度は2018年級群並みと考えられる。2020年級群の評価は難しいが、産卵量調査などから判断すると、2020年級群の豊度は2019年級群並みと考えられる。全体の来遊量は少なかった前年並みで、平年を下回ると考えられる。

(6) カタクチイワシ

例年、11月～3月期には0歳魚(カエリ・小羽・中羽銘柄)が漁獲の主体となり、1歳魚(大羽銘柄)が混じる。4月～8月期の漁獲量が低い水準で経過したことを考慮すると、2020年級春季発生群の豊度は2019年級群より低いと考えられる。2020年級秋季発生群の豊度の評価は難しいが、直近の漁況から、2019年級群並みと考えられる。直近に1歳魚が例年より多く漁獲されたことも考慮すれば、全体の来遊量は前年並みで平年を下回ると考えられる。

表1. 沿岸域の漁況経過（2020年4月～8月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網漁業の漁獲量は、577トンで前年・平年を下回った（前年比77%、平年比47%）。	中型まき網漁業の漁獲量は、748トンで前年を上回り、平年並みであった（前年比234%、平年比103%）。	
福岡	代表港中型まき網漁獲量は198トンで、前年・平年を下回った（前年比66%、平年比31%）。漁獲のうち、中・小銘柄が21%、ゼンゴ銘柄が69%であった。棒受網での漁獲はなかった。小型定置網の漁獲量は3.7トンで、前年・平年を下回った（前年比46%、平年比58%）。	代表港中型まき網漁獲量は279トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比133%、平年比117%）。漁獲のほとんどを豆銘柄が占めた。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は1トンで、前年・平年を下回った（前年比33%、平年比23%）。
佐賀	前年・平年並みであった（前年比116%、平年比86%）。	前年・平年を下回った（前年比6%、平年比18%）。	
長崎	地域により差があるが、前年・平年を上回った（前年比193%、平年比175%）。	地域により差があるが、前年・平年を上回った（前年比162%、平年比131%）。	
熊本 牛深港	漁獲量は42トンで前年を上回り、平年を下回った（前年比314%、平年比57%）。	漁獲量は567トンで前年・平年を上回った（前年比220%、平年比129%）。	
鹿児島	主要4港のまき網では、マアジ小・仔（2018～2020年級群）主体に、串木野沖、長島、甕東、繩瀬でまとまって漁獲された。まき網による漁獲量は223トンで、前年・平年を下回った（前年比58%、平年比25%）。		主要4港のまき網では、マサバ中（2014～2016年級群）主体で、4月にはマサバ中（2014～2017年級群）、5月以降はゴマサバ中（2014～2017年級群）が主体になり、マサバは甕下、立目沖、野間池、串木野沖、ツクラ瀬周辺でまとまって漁獲された。まき網によるさば類の漁獲量は8127トンで、前年・平年並みであった（前年比93%、平年比104%）。

注：「前年」は2019年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

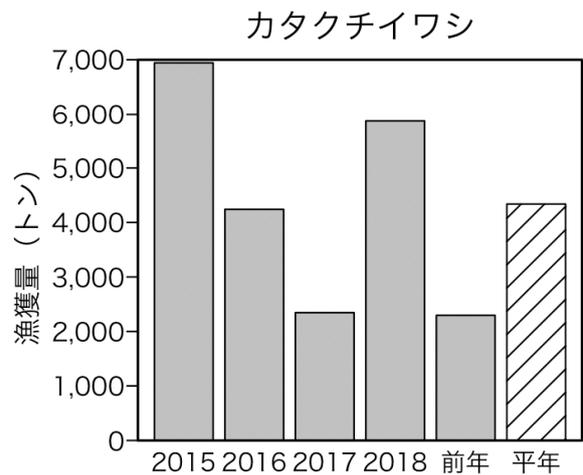
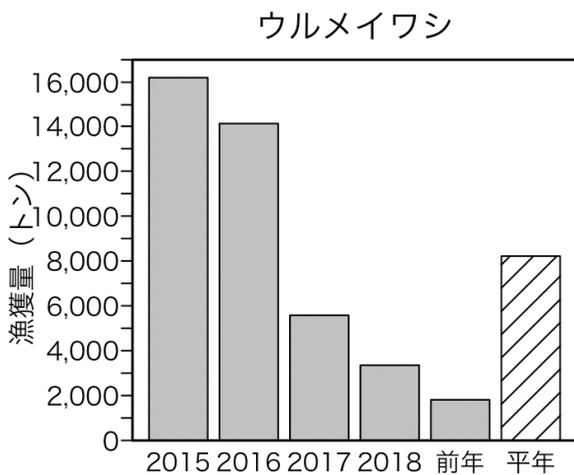
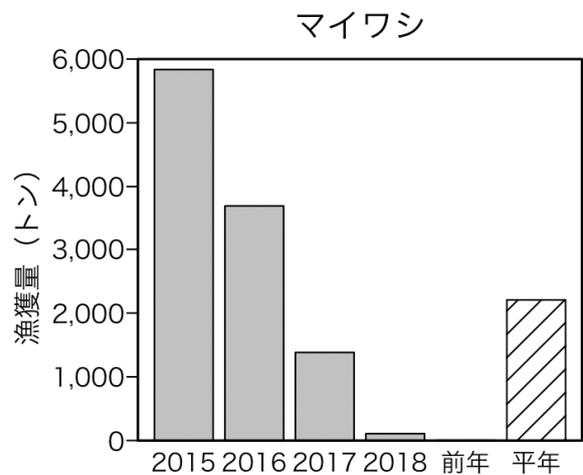
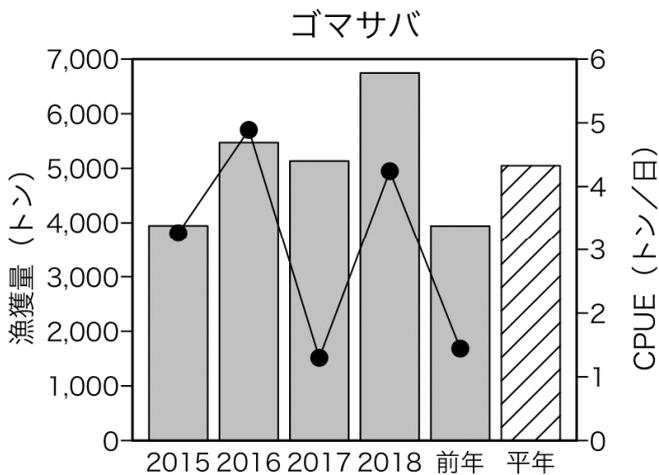
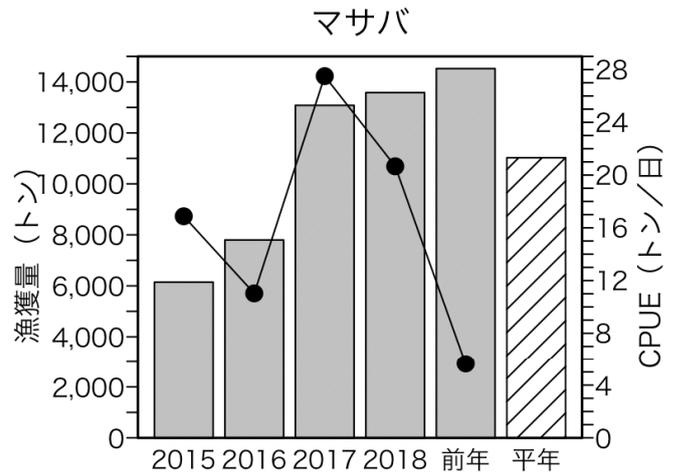
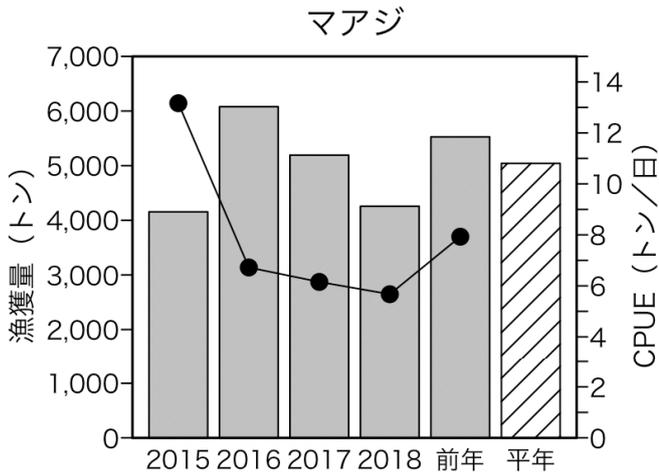
山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網漁業ではほとんど漁獲されず、前年・平年を下回った(前年比67%、平年比1%)。湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲量は、4トンで漁獲のなかった前年を上回り、平年を下回った(平年比7%)。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲量は、57トンで前年・平年を上回った(前年比94,833%、平年比386%)。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲量は、小羽・中羽主体に307トンで前年・平年を下回った(前年比46%、平年比58%)。
福岡	代表港中型まき網漁獲量は0.5トンで前年・平年を下回った(前年比10%、平年比1%)。棒受網の漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は15トンで前年を上回り、平年を下回った(前年比139%、平年比43%)。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網での漁獲はなかった。棒受網漁獲量は33トンで前年を下回り、平年を上回った(前年比51%、平年比152%)。
佐賀	漁獲がなく、前年・平年を下回った(前年比0%、平年比0%)。	前年を下回り、平年を上回った(前年比70%、平年比176%)。	前年・平年を下回った(前年比8%、平年比13%)。
長崎	地域により差があるが、前年を上回り、平年並みであった(前年比6232%、平年比83%)。	地域により差があるが、前年・平年を下回った(前年比59%、平年比28%)。	地域により差があるが、前年・平年を下回った(前年比54%、平年比50%)。
熊本 牛深港	漁獲量は230トンで前年・平年を上回った(前年比11,593%、平年比304%)。	漁獲量は786トンで前年・平年並みであった(前年比102%、平年比104%)。	漁獲量は2377トンで前年・平年並みであった(前年比81%、平年比84%)。
鹿児島	主要4港のまき網では、中羽(2020年級群)主体に、6月に阿久根沖、8月に天草沖でまとまって漁獲された。まき網による漁獲量は522トンで、前年を上回り、平年を下回った(前年比1,247%、平年比72%)。北薩海域における棒受網による漁獲量は101トンで、前年を上回り、平年並みであった(前年比5,050%、平年比115%)。	主要4港のまき網では、4月～6月は中羽～大羽(2019年級群)、7・8月は小羽～中羽(2020年級群)主体に、阿久根沖、内之浦沖、甕島周辺、8月に天草沖でまとまって漁獲された。まき網による漁獲量は763トンで、前年・平年を下回った(前年比42%、平年比486%)。北薩海域における棒受網による漁獲量は629トンで、前年・平年を下回った(前年比77%、平年比71%)。	主要4港のまき網では、6月～8月は中羽～大羽(2019年級群)主体に、八代海、天草沖でまとまって漁獲された。まき網による漁獲量は748トンで、前年・平年を下回った(前年比43%、平年比40%)。北薩海域における棒受網による漁獲量は304トンで、前年並みで、平年を下回った(前年比95%、平年比66%)。

注：「前年」は2019年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量（ゴマサバを含むが主にマサバ）の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のゴマサバ漁獲量の合計値。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
福岡県水産海洋技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
佐賀県玄海水産振興センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
長崎県総合水産試験場	(取りまとめ機関)
熊本県水産研究センター	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所